

仁王護国般若經疏の研究

若 杉 見 龍

五世紀後半シナにおいて成立したと考えられている仁王般若經には古い注釈として、天台、嘉祥、円測、良賁の四師による現存の注釈と欠本ではあるが、真諦による注釈などがある。

これら現存諸疏のうち、天台の仁王護国般若經疏（以下天台疏と略称する）については近時大いに研究が進められ、龍谷大学の佐藤哲英教授はそのすぐれた成果を発表せられておられる。同教授によれば、天台疏は天台大師入滅以後、嘉祥の仁王般若經疏（以下嘉祥疏と略称する）の影響下に成立したことが明かになった。（「天台大師の研究」五一七頁以下）

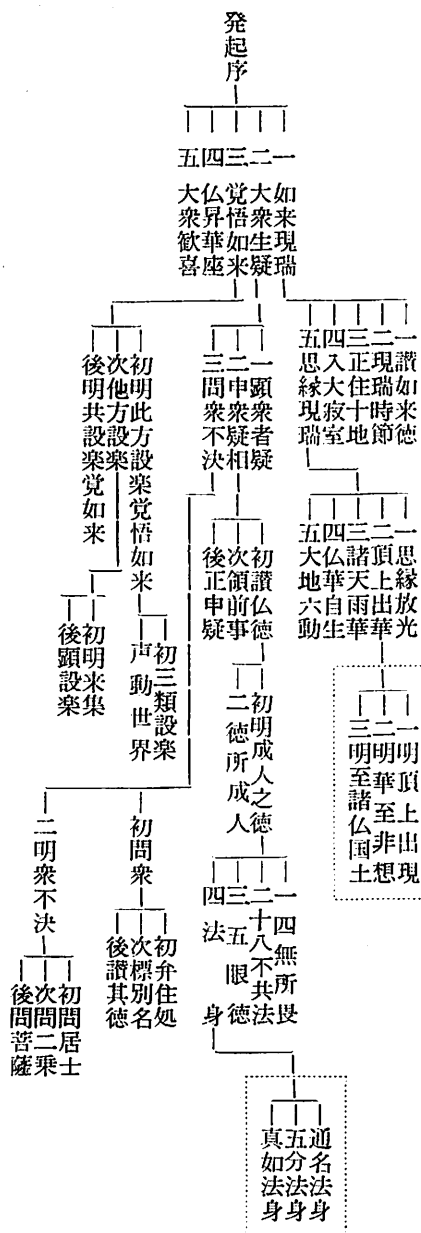
本稿では又別の観点から天台疏の成立を眺めてみたいと思う。即ち唐の円測の仁王經疏（以下円測疏と略称する）と天台疏を比較対照して、天台疏の成立について一、二卑

見を述べ、大方の御批判を仰ぎたいと思う。

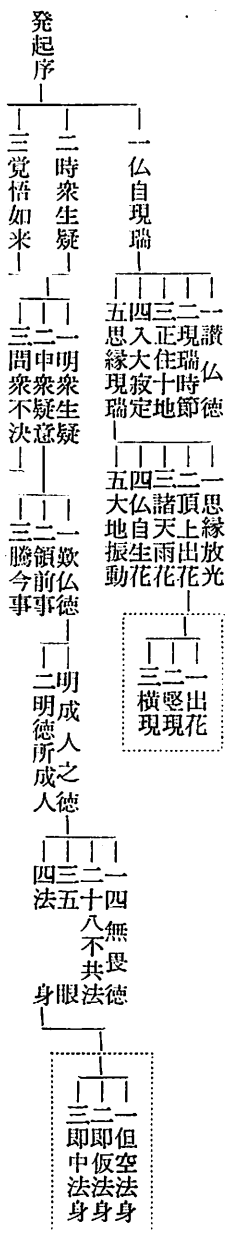
一、天台疏と円測疏を対照するに当って、先ず最初に科段を比較してみたい。又天台疏は嘉祥疏の影響下にあることが明かであるから、因みに嘉祥疏の科段を掲げる。しかし三疏の科段をすべて掲げることは与えられた紙数に制限があって不可能であるから、比較的容易に対照できる発起序の部分のみ左に掲げ、他の部分を類推して頂く手がかりとしたい。

左の三疏を比較して直ちに気がつくことは天台疏と円測疏の科段の著しい類似である。勿論文字に多少の相違はあるとしても、表現している内容はほぼ同一であることは直ちに理解できるであろう。たゞ僅かに相違する箇所としては点線で囲んだ頂上出華段と法身段の二対の箇所であるが、頂上出華段においても、天台疏の内容と円測疏の内容とが文字の相違にも拘らず、ほぼ一致するであろうことは説明するまでもないと思われる。又法身段においては法身を

正レ三十三



(正ノ三十一)



四 仏昇華座
五大衆歡喜

一 明此土設樂覺悟如來
二 他方
三 共設

一來集
二作樂
聲動世界

三類設樂

二衆不決

一問
一舉處歎德

二明次第舉問
三問聲聞
三問菩薩

二舉名處
三歎德

明十方菩薩雲集作無量音樂覺悟如來

相違しているというべきであろう。そしてこの著しい類似は発起序のみに止らず、疏全体に就いても言

い得るのである。

二、次に嘉祥疏と円測疏と天台疏の三疏の文章を対照してみると、大要次のように考えられる。

A、円測疏と天台疏との文章がほぼ一致している箇処

B、嘉祥疏と円測疏の文章が組み合わさって、天台疏の中に見られる箇処

C、更に天台疏が円測疏を批判している箇処（たゞし一箇処）

D、天台疏が嘉祥疏を引用、批判或は採用している箇処

以上の四例が考えられるが、右のうちD例についてはすでに佐藤教授が挙げておられるので、（同書五三六頁以下）A・B・Cの三例について例文を掲げてみたいが、説明は紙数の都合で、特に重要な箇処以外は省略させて頂く。

A、円測疏と天台疏との文章がほぼ一致している例文

円 測 疏

経般若亦無菩薩 釈曰。 第三人¹

法俱空。² 此即法空。 忘説人空。

准可知故。 略而不説。 就法空中。

文別有二。 初約因位。 以弁法空。

後依果位。 以釈法空。 前中有三。

初標。 次徴。 後釈。 此即標也。

謂般若若法。⁴ 菩薩是人。⁵ 人中求

天 台 疏

般若亦非菩薩下。 三明人法¹

俱空。² 文中亦合明人空。 但文

略故也。³ 自為二別。 一約因位

弁法空。 二約果位弁法空。 初

文三。 今初標也。 般若若法。⁴

菩薩是人。⁵ 般若中求菩薩不可

得。⁶ 即是法空。 （正³³ 268 B）

法不可得。

即是法空。

(正³³ P. 384 C)

右の例文のうち、棒線を引いた部分は文章がほぼ一致している部分、波線を引いた部分は内容がほぼ一致していると考えられる部分であることを示し、数字はそれぞれの対応箇處であることを指示

する。以下同様である。
B、嘉祥疏と円測疏の文章が組み合わさって天台疏の
中に見られる例文

嘉祥疏

色法者從細微成麤微。

從四

微成四大。

從四大成諸根。

此

明色法也。

九十利那為一念。²

一念中一利那逕九百生滅。

念有九十利那。

合逕八萬一千

生滅。

以生滅折利那。

利那折

一念。(正³³ P. 325 C)

円測疏

經九十利那至

九百生滅

釈曰。

第四世尊釈通。¹

以九十小利那。

成一大念。

一大念中一小利那。

復有九百生滅。

是故前言生時即

有滅也。

或復多利那為一念。

(正³³ P. 382 B)

天台疏

九十利那下。

四釈通。¹以九

十小利那為一大念。一念中一

利那。復有九百生滅。是故生

時即有住滅也。²又九十利那為

一念。一念中利那。經九百

生滅。一念有九十利那。合有

八萬一千生滅。以生滅抵利那

利那抵一念。

(正³³ P. 267 A)

右の例文のうち、二重棒線を引いた部分は嘉祥疏と天台疏とは一致している部分、棒線を引いた部分は前例文と同じく円測疏と天台疏との一致し

てゐる部分であることを示す。
C、天台疏が円測疏を批判している箇所

嘉祥疏

言三地九生滅釈有二義。一者八九十地皆有二心。合九生滅也。第二義者變易三界中各有三種意生身名三地九生滅。初地至五地名三昧行意生身。六七二地名覺法自性意生身。八地已上名種類俱生無作行意生身。三藏師云。一見地在初地。二修地在二地已去。三究竟地在十地。此三地中各有初生。次住終滿為九生滅也。言前三界中余無明習果報空者。上來明五住正使。此言無明習氣也。
(正³³ P. 327 C)

円測疏

釈曰。第二明變易生死空。然釈此文自有兩釈。若依本記。即是四種變易生死。無明習為縁。得此果。文言三地者。一見地。從十廻至三地。除伴者。出觀見有之執強。故言伴。助道法亦呼為伴也。二修地。從四地至七地。除羸弱者。出觀見有執不微弱也。三究竟地。八地至十地。除微細者。但見有之執不現前。稱之微細也。九生者。合十地為三地。一地始住終三生。此三地為九生也。此通結上下十地。

(正³³ P. 385 B)

天台疏

三地九生下。二明變易生死空。有人言。三地者。一見地。從十廻向至三地。二修地。從四地至七地。三究竟地。從八地至十地。此別接通意也。九生滅者。前三地中各有始住滅云九生滅也。又變易生死三界中各有三種意生身。三界名三地。各有三種意生身生滅。名九生滅也。從初地至五地。名三昧樂意生身。六七二地名覺法自性意生身。八地已上名無作行意生身。此通別教意生也。余無明習者。上明五住正使。此第二明習氣空也。

(正³³ P. 268 B.C)

右の文によれば、円測疏において、円測が三地を解するに、一、見地は十廻向から第三地まで、

二、修地は第四地から第七地まで、三、究竟地は第八地より第十地までと解しているのであるが、円測疏の二行目に「若し本記に依れば」とあり、本記とは円測疏では真諦の疏を指しているので、一見「文言三地者」云々は真諦の見解の如く見られるが、幸いにも嘉祥疏に見られるように、真諦の見解を嘉祥が「三藏師云」と述べている。即ち嘉祥は真諦を称ぶに三藏師と称んでおり、真諦の見解は一、見地は初地、二、修地は第二地以上、三、究竟地は第十地であることが知られるので、天台疏にいう「或人云」という或人とは円測を指していることは明かであろう。

以上円測疏と天台疏と関係のあるA、B、Cの箇處を天台疏について数えたと百七十五箇處にも及び、C文例において、天台疏が明かに円測の見解を別接通と批判しているのに徴しても、又科段の著しい類

似によってみても、天台疏は円測疏を参照していることが判る。逆に円測疏について言えば、如何なる部分についても、天台疏の影響を些かも蒙っていない。更に引用、批判或は見解の採用等の箇處を天台疏について見れば、五重玄の部分は嘉祥疏に、入文解釈の部分は円測疏に多くを負っていると言える。

（その箇處を指摘して証明すべきであるが、紙数の関係で省略した。）

然らば（天台疏は何時頃の成立であろうか。円測疏の成立年代は現在のところ不明であるが、円測疏には玄奘の訳した経論が多数引用されているので、玄奘訳の経論の訳出年代が確認できれば円測疏の成立年代も推定でき、更に天台疏の上限も推察できようが、今の所では天台疏の記載の見あたらない大唐内典錄成立年時の紀元六百六十四年を上限とする外はない。そしてその下限であるが、台州録に記されている智者大師墳前石柱碑（386）の記事を信頼すれば、紀元七百三十四年までとなるのであるが、これには疑問点がない訳ではない。それは天台疏と六祖荆溪（711〜7

82)との関係である。もし前記の時代(664~734)に天台疏が成立していたならば、荆溪は主著たる玄義釈籤、文句記、輔行伝弘決の中で、仁王経について、それぞれ八回、五回、十回と説き及んでおり、その中で仁王経と法華経との関係、或は菩薩の行位という重要問題に触れているのである。もし本疏がすでに成立していたならば、天台宗に關する資料を広く蒐収したと思われる荆溪が本疏を引用しない筈はないと考えられる。(この点については又別な機会に詳細を発表したい)しかし前述した釈籤、記、弘決或は止観義例や止観大意等に本疏の名前は無論、本疏の一節さえも見あたらないのである。即ち博学なる荆溪すら本疏を知らなかったようである。これによってみるに、果して本疏は荆溪當時存在していたのであろうか。深く疑問視せざるを得ないことを記して結びとする。

六老日向上人の出自について

佐久間 珖 甫

六老僧日向上人の出自については確かな所伝がなく、今目みられるものはいづれも江戸期に成ったもので、向師入寂後四百六十年を経た享保十五年編述という六牙院日潮の『本化別頭仏祖統紀』^①を初見とするようである。同書に「實記、口碑為『世家』とみえ、このころ既に古文獻はなく口碑をたずねられて編述されたことがわかる。同書によると「父姓者藤原氏者小林名者民部実信為正治帝衛兵曹高曾皆衣冠也。高祖之父貫名氏重忠有通家好、元久元年甲子実信与千伊勢平氏而叛遂放_し總之上州埴生郡深原郷」とあり、貫名重忠と通家の好があり、元久元年伊勢平氏の反乱に加り、上総深原に流謫されたとしている。しかし年代的に不相応であり、実信の流謫説にはいささか疑問がある。その後三十年あまりを経て編述された玉沢の境持院日